

家庭科教員養成において教科指導の力をつけるプログラムの検討

Study on the program to cultivate an ability of the subject instruction in the Home Economics teacher training

高木幸子・中村和吉・飯野由香利・山口智子・杉村桃子

Sachiko TAKAGI・Kazuyoshi NAKAMURA・Yukari IINO
Tomoko YAMAGUCHI・Momoko SUGIMURA

1. 問題の所在と目的

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ¹⁾によれば、社会の変化に向き合い適切に対応していくため、学校教育を通じて育むべき資質・能力を教育課程全体の構造の中でより明確に示し、それらの資質・能力を子供たちが確実に身に付けることができるよう、教育課程の全体像を念頭に置きながら日々の教育活動を展開していくことが求められている。そこでは、学校教育を通じて子供たちが身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容、学び方の見通しを示すことや社会において自立的に生きるために必要な「生きる力」を育むことが示されている。

中学校技術・家庭科（家庭分野）や高等学校家庭に関する記述に注目すると、「普段の生活や社会に出て役立つ」ことや、「将来生きていく上で重要であること」など、有用感の高さがこれまでの実践の成果として示されている。一方で、「社会構造の変化や家庭や地域の教育力の低下等に伴い、家族の一員として協力することへの関心が低いこと」や「家族や地域の人々と関わること、社会に参画することや家庭での実践が十分ではないこと」などが現状認識に基づく課題として指摘されている。そのうえで、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化等に加えて、グローバル化や少子高齢社会の進展、持続可能な社会の構築等、急激な社会の変化に主体的に対応することが求められている。

小学校段階から高等学校段階を通して、学校教育における教科「家庭科」の目標は、実践的態度の育成である。人の生活の営みに係る多様な生活事象が学習対象として位置付けられ、生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造するために必要な知識や技能や身についた力を現実の生活に生かす力の養成が求められている。今回の審議のまとめにおいても、「実践的・体験的な学習活動を通して、家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けるとともに、生活の中から問題を見出して課題を設定しそれを解決する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする態度等を育成することを目標とする。」とされている。このような学習を展開できる教員を養成するためには、家庭科教員養成課程においても、課題解決的な学習過程を基本構造とするプロセスを経験し、児童生徒を取り巻く環境の理解や、生活の科学的理解を図ることが必要である。とりわけ、授業実践を支える教師の力量に関しては、「何を教えたか」から「子どもが何を学んだか」の視点から論じることの重要性が指摘されており（文科省2008）²⁾、そのための力量形成についても養成・採用・研修の各段階を通じて形成されるよう総合的に講じられることが求められている（教養審1999、中教審答申2012）^{3) 4)}。

これまで筆者らは、家庭科教員養成段階において、家庭科教員に求められる実践的な力量形成のあり方を検討してきた。具体的には、家庭科教員として指導の際に重要視したい自立や共生の概念を、学生に意識させることや日常生活の諸事象を専門的な視点から科学的・分析的に理解する方法や手続きについて、教科専門教員と教科教育法教員との連携体制のありようを探ってきた⁵⁾。また、家庭科教員に必要な実践的な力量について、身に付ける内容や順序を実証的に検討し提案してきた^{6) 7)}。これまでの検討を通じて、家庭科教員に求められる力量を、家庭科教育内容の理解、教える立場からの実践的指導技術、学習状況や授業の良否の視点に基づいた省察の3点ととらえ、各力量の修得に重きをおいたプログラムでカリキュラムを構成し、その効果を検討してきた。

本研究では、中等家庭科教育法のプログラム内容とプロセス、学生の取り組み内容と教員体制との関係の見直しを目的として進める。具体的には、教員養成段階の学生が、専門教科として学んだ内容を中学生（あるいは高校生）に教えるための教材や授業を考え指導計画を作成し、学生の考える授業や教員からの助言による指導計画等の変容についてその意味を考察する。

2. 方法

(1) これからの「家庭科」に求められる考え方

これからの家庭科を考えるにあたって、上述した審議のまとめやその議論を支えてきたワーキンググループの報告を整理する（表1）。

表1 これからの「家庭科」に求められる考え方

家庭科における「見方・考え方」	学習対象	人の生活の営みに係る多様な生活事象
	ねらい	生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造する
課題を踏まえた目標の在り方	生活の営みに係る見方・考え方	家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること
	ア 資質・能力を育成する学びの過程 イ 指導内容の示し方の改善	1) 生活の課題発見、2) 解決方法の検討と計画、3) 課題解決に向けた実践活動、4) 実践活動の評価・改善 ①小・中・高等学校の内容の系統性の明確化、②空間軸と時間軸の2視点から学校段階に応じた学習対象の明確化、③生活の中から問題を見出し、課題を設定し、解決方法を検討し、計画・実践、評価・改善するという一連の学習過程を重視
教育内容の見直し	中学校 技術・家庭科 <家庭分野>	家庭の機能を理解し、家族や地域の人々と協働することや、幼児触れ合い体験、高齢者との交流等、人とよりよく関わる力を育成するための学習活動、食育を一層推進するための中学生の栄養と献立、調理や食文化などに関する学習活動を充実。金銭の管理に関する内容や、消費生活や環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎となる内容を充実。実践的な学習活動を一層充実。主として衣食住の生活において、日本の生活文化を継承する学習活動を充実。
	高等学校 家庭科	少子高齢化等の社会の変化や持続可能な社会の構築、食育の推進等に対応し、男女が協力して主体的に家庭を築いていくことや親の役割と子育て支援等の理解、高齢者の理解、生涯の生活を設計するための意思決定や消費生活や環境に配慮したライフスタイルを確立するための意思決定、健康な食生活の実践、日本の生活文化の継承・創造等に関する学習活動を充実。「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」等、主体的に取り組む問題解決的な学習を一層充実。
学習・指導の改善充実や教育環境の充実等	ア 「主体的・対話的で深い学び」の実現	①「主体的な学び」：学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結びつける、②「対話的な学び」：多様な人との対話や先人の考え方（書物等）で考えを広げる、③「深い学び」：教科等で習得した「見方・考え方」を働かせて、学習対象と深く関わり、問題を発見・解決、自己の考えを形成・表現、構想・創造。
	イ 教材や教育環境の充実	①生活事象の原理・原則を科学的に理解するための指導や学習の見直しをもたせる指導、個に応じた指導、児童生徒の協働的な学びを推進するための指導にICT活用を充実、②実感を伴った理解を深めるために、実物や標本、乳幼児触れ合い体験や高齢者疑似体験等、教材の充実、③幼稚園や保育所等、高齢者施設、消費生活センター等との連携、④教員が常に新たな情報を入手し、教材研究や指導力向上を図ることができる研修の充実

(2) プログラムの内容

実施したプログラムは、3つの内容で構成している（図1）。一つは、本プログラム全体の理解を図り、プログラムを通して身に付ける力を意識するために準備した内容である。この内容を行う際に重要なのは、学生自身が主体的に教材研究や授業づくりに取り組む基盤を作ることである。そのために具体的な目標を提示すること、授業を可視化するツールとして学びの構造図^{注1)}の枠組みを与える。二つ目の内容は、教材研究に取り組む内容である。この部分では、学生たちが、それまでに学んできた専門科目の内容を振り返り、どのような内容を教材化するか考え、中学生または高校生を対象に、具体的な授業の構想を行うものである。教育実習を経験していない学生であることから、授業を行う立場で考える初めての経験である。ここでは、授業を受ける立場では理解できていると思っている内容でも、教える立場から教材として作成しなそうとすると、決して簡単ではないことに気付かせたい。その上で、生徒の発達や学習について理解を深めることを求めたい。そして、三つ目の内容は、教科専門の教員からの助言を受けて、学生が最初に考えていた教材や教材を含む授業を改善する内容で構成する。第二の内容と同様に、ここでは、学生たちが考えたり相互に相談したりできる時間を確保するとともに、教員からの指摘や助言を受けて、どのように改善するかが問われる。ここでは、自分では気づいていなかった不十分さを受け入れ、どのように改善すれば中・高校生にとって理解しやすい授業となるのかを考えることを重視する。

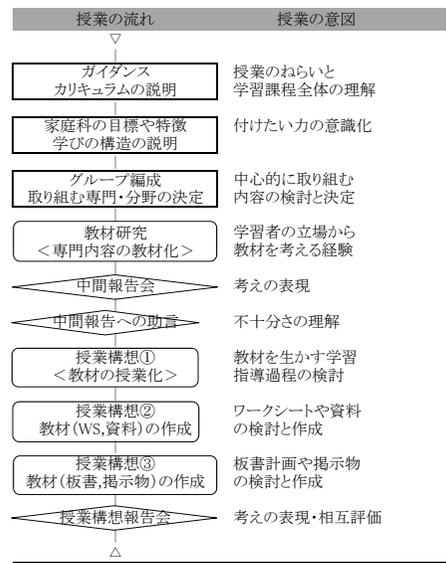


図1 プログラムの概要

(3) 学生が身に付けた教材研究の力をとらえる方法

学生が専門科目で学んだ内容を教材化したり、教材を取り入れた授業を考えたりする力の評価は、次の2つの資料を基に行う。

① 学生が作成する授業案の内容

本プログラムでは、2回の報告会を位置づけている。そこでは、全員が作成した授業案を冊子体にして報告会資料として共有する。中間報告会に向けて準備される資料は、学生自身の考えに基づいて作成される。他方、第2回目の授業構想報告会（最終報告会）に向けて作成される資料は、中間報告会の資料に対する教科専門の教員から示された助言を踏まえて修正される。したがって、2つの資料を比較することで、授業案の何がどのように修正されたのかを明らかにすることができる。また、教科専門の教員の助言が生かされていたか否かについては、各教員に確認することで考察を深めることができる。

② 最終報告会での相互評価

教員養成段階においては、学生たちがよりよい授業を考えることができるとともに、教材や授業について自分の考えに基づいて判断したり、意見交換したりする力をつけることが求められている。本稿では、最終報告会で相互評価、自己評価を行い、その記述内容を整理する。そして、これらの記述内容を基に、学生の授業に対する見方や考え方を考察する。

4. 結果と考察

(1) 授業テーマから見る学生の考え

最終報告会に掲載した全学生の授業テーマを中間報告会の時のテーマと比較すると、複数の学生が授業テーマの表現を変えていた（表2）。テーマの表現内容を概観すると、「健康面から（No.1）」や「取り扱い表示から（No.6）」など、学習の視点がテーマから読み取れるようになったものや、「やってみよう」「考え

よう」など学習者に対して呼びかける表現（学生No.3,8,13）に変えていることが確認できた。授業テーマをかえた理由は問うていないが、授業内容を具体的に考えられるようになることで、テーマにもそれが表れるようになったと思われる。

表2 中間報告会および最終報告会の授業テーマ

分野	No.	中間報告会（テーマ1）	授業報告会（テーマ2）
食 領 域	1	食品の選び方を考えよう	健康面から食品の選び方を考えよう！
	2	郷土料理を地域の方々で作ってみよう	郷土料理を地域の方々で作ってみよう
	3	和食についての理解を深めよう	和食ってなんだろう
	4	野菜を調理しよう！	野菜の調理
衣 領 域	5	自分で衣服の手入れをしよう！	自分で衣服を手入れしよう！
	6	衣服の手入れと取扱い絵表示を知ろう	取扱い表示から失敗しない洗濯方法が分かるようになるろう
	7	洋服のお世話をしてみよう！	洋服のお世話をしてみよう！
	8	被服と身体の関係について知ろう	本当に自分の体に合った服着ている！？
	9	衣服の入手から処分までの流れをつかもう	環境から考える衣生活と衣服の購入・処分方法
住 領 域	10	誰もが安全に暮らせる住まいを考えよう！	誰もが安全に暮らせる住まいを考えよう！
	11	快適な住まいをプロデュース！	快適な住まいをプロデュース！
	12	私の家は大丈夫？耐震コンテスト	私の家は大丈夫？？地震ミニ実験室
	13	私はインテリアコーディネーター	インテリアコーディネーターになってみよう
家 族 保 育	14	家族関係をよりよくしよう	家族関係をよりよくしよう
	15	家族とは？ 一家庭生活と自分の成長について考えよう	家族とは？ 一自分の成長と家庭生活について考えよう
	16	児童文化を理解し関わりを深めよう	幼児の生活と幼児とのふれあいかたについて考えよう！

(2) 構想授業内容に対する助言と授業内容の変容（事例）

受講学生たちは、1年次、2年次（前期）で受けた授業などを対象に、各自の課題意識に基づいて授業を構想した。中間報告会での授業構想案に対して、所属教員から助言や指摘を行い授業改善の視点を提供した。中間報告会での交流を受け、学生は、作成した指導案やワークシート案とともに助言を受けたい内容、不安に感じている専門知識に関する考え方や教材適性などを記述し、所属教員はそれぞれの専門性を活かして、質問への回答や全体の内容に対する助言・指摘を返した。

たとえば、No.15の学生は、これまでの自分の成長を振り返り、家族や周囲の人々との関係に関心をもち、家庭や家族の基本的な機能について理解することを目的に授業を構想していた（図2、左側の流れ）。中間報告を終えて提出された指導案には、4時間構成で考えた内容のつながりがすっきりせず、順序を変えたほうがよいのか、あるいは内容を絞ったほうがよいのかに悩んでいることが質問として記された。担当教員からは、順序を変える場合（図3、下線①）、内容を絞る場合（同、下線②）、それ以外の考え方（同、下線③）が例示されるとともに、考える際に重要視すべき点の助言（同、下線④）が返された。学生は、題材全体としての指導過程を見直し、分かりやすいアニメーション教材から「家族とは何か」に向かう課題意識を醸成するリアルさのある映像教材に変更し、そこでの課題意識を踏まえて、「家族をつなぐシナリオ」を考えるロールプレイを実践的活動として加え修正していた（図2、右側の流れ）。

1. **題材名**
「家族とは?—家庭生活と自分の成長について考えよう」 → 「家族とは?—自分の成長と家庭生活について考えよう」
2. **題材目標**
○これまでの自分の成長を振り返り、家族や周囲の人々との関係に関心をもつ (関心・意欲・態度)
○家庭や家族の基本的な機能について理解する (知識・理解)
○これからの自分と家族とのかわりに関心をもち、家族関係をよりよくする方法を考える (創意工夫)
3. **指導計画**
(計4時間)

題材		学習内容		(修正した指導計画)	
家族とは① (家族の意義と定義) 1h	「あなたにとって家族とは?」という問いから授業をスタートさせる。 ・携帯電話会社などが行っている「家族割」。しかし「家族」の定義は各社異なっていることについて考える。	① “家族”という言葉から何が連想できる? 「What's family イメージマップ」を作ろう! ② ミニアンケート—家族の役割はどのようかと思おうか議論 ③ 家族の定義って? 携帯電話会社などが行っている「家族割」。しかし「家族」の定義は各社異なっていることに注目し家族の定義について考える。	家族とは I (家族の意義と定義) <家族の核心に迫る> 1h	① “家族”という言葉から何が連想できる? 「What's family イメージマップ」を作ろう! ② ミニアンケート—家族の役割はどのようかと思おうか議論 ③ 家族の定義って? 携帯電話会社などが行っている「家族割」。しかし「家族」の定義は各社異なっていることに注目し家族の定義について考える。	
家族とは② (家族の機能と自分の役割) 1h	・日本のアニメから、家族のありかたの多様性について学ぶ。 ・アニメ「ちびまる子ちゃん」一家に注目。家族の機能について考える。 ・ロールプレイングを通して、家族の一員としての自分の役割と家族に家族関係をよりよくする方法を考える。	家族とは II (家族のありかたの多様性) <家族という価値観の改革> 1h	① あなたはどのよう思う? 血縁関係は家族の要素か 映画「そして父になる」の一部を見せ、個人の感想を記入した後、血縁関係は家族を繋ぐ要素か議論する。 ① 世界を見渡せばこんな家族が…!? 様々な形態の家族の写真や絵を示す。周囲の人と家族に対する認識の違いがあることを認め、価値観の改革を図る。		
これまでの自分の成長と家族、周囲の人とのかわりを振り返る 1h	・絵本「someday ちいさなあなたへ」の読み聞かせをする。 ・これまでの自分を振り返り、「わたし物語」の作成を開始する。 ・各自宅で家族に聞き込み調査を行う。	家族との関わりについて(よりよい家族関係を築いていくために) 2h	① あなたはどの点? 家族とのかわり度チェック(個人) ② 考えよう! 家族をつなぐキーポイント ③ 班ごとにロールプレイングのシナリオを考える。 ④ ロールプレイング実践 ⑤ ロールプレイングを評価し合う ⑥ どのようにしたらもっとよくなるか検討する。		
これからの家族と自分 1h	・これまでの学習を踏まえ、「家族とは何か」について再度考える。 ・これからの自分と未来の家族をイメージして、「わたし物語」の1ページを作成する。	これからの家族と自分 1h	① あなたにとって “家族” とは何か? について再度考える。 ② わたしと家族の物語をつくろう! これまで家族に支えてもらったとき、これからあなたが家族のためにできることはどのようなことかをまとめ、「わたしと家族の物語」を作成する。		

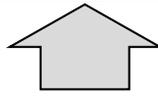


図2 学生の考えた指導計画の変容 (学生No.15)

Q：つながりの悪さを改善するために順序を入れ替えたほうがよいか，内容を絞ったほうが良いのか

→ 確かに今の流れだとつながりが悪い印象があります。

流れを変えると考えると①，例えば「somedayちいさなあなたへ」の読み聞かせを通して，家族というイメージを共有し，その後2時間目のような内容を扱い，その後にあなたにとっての家族は？と問う流れもあります。この流れだと，家族のイメージを膨らませるところから徐々に具体的な家族やその役割に目を向け，徐々に自分の家族に重ねるという意図です。

また，内容を絞るとすれば②，絵本よりはアニメのほうがよりリアルであることから，具体的に考える教材として使用できそうです。ただ，サザエさんもちびまるこちゃんも，現在の子供を取り巻く家族構成とは重ならなくなっている点が気になります。教材としてはやや古い印象です。

今と未来の自分と家族を事実データや推計データから考えさせることも可能なのでは？③

いずれにしても，子供たちが自分の未来を考える際，ありたい(なりたい)自分と事実に基づき描く現実や近未来を比べることで，そのギャップが可視化されます。そこから考えることが始まると思ってください。④

図3 学生からの質問（学生No.15）と返された教員からの助言

学生 No.15の考えた授業は，第1時間目は「あなたにとっての家族」を問い，これまでの認識に疑問を投げることから始まる。「家族割」のさす家族の範囲が異なることや多様な家族の様相が共有される中で，「家族」はどのように説明できるのかを考える。2時間目は，「ちびまるこちゃん」の家族構成を基礎として，家族の役割に目を向け，グループでのロールプレイを通して家族関係をより良くする方法を考える。次の3時間目は，絵本を読み聞かせ，これからの自分や家族に思いを巡らせ，4時間目に，自分の考える「家族」の在り様を文章にまとめた。

この授業の課題は，2時間目と3時間目の学習内容のつながりが悪い点であった。その点は学生も課題と感じて質問しており，教員からは3時間目以降のつながりをよりよくするための考え方について，学生が既に持っている改善視点と新たな視点を助言として返した。それを受けてこの学生は，教材を変更して課題意識の焦点化を図る流れに修正してきた。具体的には，血縁関係のない父子関係が描かれている映画の一部やさまざま家族の形(夫婦，夫婦と子供，夫婦とペット，親類同士，大人と子供，親友同士，祖父と孫など)を写真やイラストで紹介しながら「家族」の捉え方が多様であることを実感し共有する流れを構成していた。次の時間には，「家族をつなぐキープポイント」を考えるために，家族間の関わりや関係作りを言葉や行動を具体的に考え演じるロールプレイを構成した。

このような指導計画の変更注目すると，生徒がなんとなく理解している家族というものについて，疑問を持ち，自分の捉え方や友達との違いを感じ，自分事として考える指導計画への修正が行われていたことが分かった。この点は，生徒が授業を通して考え続ける中心テーマにブレがなくなったということであり，用いる教材についても，生徒が当たりまえだと思っている認識を再考させる役割を果たしていると思われた。

1例のみを述べたが，他の学生も，教員という位置から，専門科目で学んだ内容を教材化し，授業を考える経験をした。また，自分には思いつかなかった視点からの助言や専門知識の補足を受けた上で修正を進めた。以上より，修正内容の大小はあるものの，学生たちが修正して仕上げた最終の授業計画から，中・高校生向けの家庭科授業として，よりわかりやすい授業に変容していることが伺えた。

(3) 授業構想を通して付いた力，学んだ内容

最終的に完成した学生の授業案を小グループで報告しあい，その良さや課題を交流した。その後，科目の履修を通して身に付いた力や学んだと感じた内容をまとめた。学生たちが身に付いたと感じた力の記述を分類すると「学ぶ側から考える力」「具体的に考える力」「学ぶ意味を考える力」の3つに整理できた(表3)。本格的に中・高生向けの家庭科授業を考えるはじめての経験であり，学ぶ側から考えることは，具体的に考えることと深く関係している。この両者が意識されたことは，本取り組みの成果であると考えられる。合わ

せて学生たちは、自分の考える家庭科授業の内容が生徒の生活にどのようにつながっていくのかを考えることができていた。いずれにしても学生たちが身に付いたと感じる3つの力は、どれも教員が授業を考える際に不可欠な要素である。

付いた力と同様に、授業づくりを通して学んだ内容の記述を整理した結果、4つの内容にまとめられた(表4)。一つは、授業を考える難しさであった。教える内容の価値や意味を説明することも、生徒にとっての学習目標を設定することも初心者である学生にとっては大変難しい。2年次の段階で、授業構想や学習指導案の作成といった教員にとって当然身につけるべきスキルを意識できたことは家庭科教員をめざす上でも意味がある。

表3 学生が付いたと感じた力

付いた力	具体的な記述例
学ぶ側から考える力	生徒にとっての題材の意味を深く考えて授業を考える力/生徒の実態にあった手立てや支援を考える力/生徒への配慮/どういう授業なら楽しく頭に残るのかを考える力が付いた。
具体的に考える力	「実際に・・・」と具体的に考える力/教材や授業にする経験を通じて、実際の授業をリアルに想像して授業を作る力/授業を考える力/教えるための知識の必要性
学ぶ意味を考える力	自分が学んでいる内容にどのような意味があり、どうやって生活に結びつけていくのか考える力/先を見通す力/家庭科の内容の結びつきを理解する力/自分の意見をまとめる力/学習指導案の書き方

表4 中等家庭科教育法の履修を通して学んだ内容

学んだ内容	具体的な記述例
考える難しさ	指導案を考える活動を行って、子供たちに学ばせて行くことや子供たちに身につけさせたいことをどのような授業を行うことで実現させられるか、ということを考えることの難しさ/ワークシートや板書計画を立てる経験から、どのように工夫を行って生徒たちにわかりやすく伝えるかを考えることの難しさ/楽しくて心に残る、日常でも実践、役立てようと思う授業を考えることの難しさ/自分が習った授業で楽しかった部分を入れてみたが、実際に自分が先生になって授業をするのは難しいこと/題材観・指導観・生徒観を詳しく考えることにより、授業をする意味を理解すること/
生徒の実態から支援を考えること	指導案を作成するにあたり、生徒にどのような手立てが必要なのか、どのような教材を用い、どう提示するかをしっかりと考えなければならない/様々な生徒がいることを想定すると、それに対する教師の支援をもっと明確にしていかなければならない/子どもからどういう質問が来るかなどを考えて作成すると、本時の完成度は高くなるが、実際子どもたちが手に取るのはワークシートである。ワークシートがわかりづらいとなかなか支援できない/C評価の子をB評価に近づけるために、より丁寧な手立てを考えることが、教師が授業をする上で重要なこと/今までは、生徒がわかりやすい内容・生徒が楽しい内容を意識していたが、授業が生徒の日常生活にどう役にたつのか、生徒がこの授業を受ける意義はあるかを考えること/本時の授業の流れを考えるにあたって、生徒がどのように考えるのか、どのようなところでつまづくのかを考慮した。生徒の言動を先回りして考える力は教員にとって必須だと学んだ/勉強した内容や生徒のレベルに合わせて、あえて教えないところ、触れないところを作り削ることが大切だ/家庭科という教科は、生活に活かそうとする態度を育てるという教科の側面から、生徒の実態を把握し、授業を構成すること/
授業を作る際に配慮すべきこと	教師が学んで欲しいと思っていることがどのようにすれば伝わるのか、その順番でわかりやすいか、生徒の生活をよりよくする手立てになっているかなどを考えること/ねらいを定め、その実現に向けた方法を取れているか考えて授業計画を立てることが大切だ/統一感のある授業を作るにはどうすればよいのかを学んだ。学んだことを踏まえて、これからどうしていくのかを生徒に考えさせる機会を最後に設けるとまとめ、生徒の理解が深まり易くなること/周りのものと関連付けて授業を作ることにより、そこから学習できることはたくさんある/どのようにいかにするかを考えて授業を考えると定着しやすい/先を見通して全体の計画を立てる難しさと大切さ/
教えるための知識をもつこと	教材研究する中で、自分の知識のなさ、専門の知識を持つことの大切さ/一つの授業を作るのに何時間もその題材を勉強しなければならない/授業を作るにはその授業で取り扱うよりも深い内容を知っていないと作れない/家庭科は体験の数だけ授業の幅が広がる、授業者自身の様々な経験が不可欠/

また、学生は、授業を生徒の実態に合わせることの重要性や具体的な配慮事項を学んでいた。1週間の観察実習を経験しているだけの学生にとって、生徒の実態をリアルにイメージすることは困難である。しかし、それでも生徒がどのように反応するだろうかなどと考え、その姿を説明し合うことで実態を捉える枠組みが精練される。そして、生徒の姿が描けるようになると、授業を進める過程での配慮事項を具体的に考えられるようになる。3年次になれば2週間の教育実習を経験し、実際の生徒がどのように反応、行動するか身を持って経験することができるが、前もってその姿を予想できるようになることは、教育実習という貴重な経験の場の意味をより深く理解できることにつながる。そして、4つ目の学びは、教えるために必要な知識の必要性の理解である。自分がわかっていることでも、学んでいない生徒にわかるように説明することの難しさを知ることで、言葉の選び方、質問の仕方など、学生自身の教授スキルを自覚的に学ぶ契機となることが期待できる。

5. まとめ

本研究は、中等家庭科教育法のプログラム内容とプロセス、学生の取り組み内容と教員体制との関係について考察を深めることを目的として進めた。具体的には、教員養成段階の学生が、専門教科として学んだ内容を中学生（あるいは高校生）に教えるために教材や授業を考え、指導計画を作成し、学生の考える授業や教員からの助言による指導計画等の変容についてその意味を考察した。

学生は授業の指導計画を考えることを通して、「学ぶ側から考える力」「具体的に考える力」「学ぶ意味を考える力」の3つを身に付けたと認識していた。また、授業づくりを通して学んだ主な内容は、「授業を考える難しさ」「生徒の実態から授業を考えること」「授業を作る際に配慮すべきこと」「教えるための知識を持つこと」であった。これらの点は、教科指導の力量形成にとって、極めて重要な部分である。今後は、教科専門の教員の関わり方について、実証的な検討を進める必要がある。

教員養成段階の学生にとって、将来、教員として過ごすために必要な授業実践の力量を身に付けることは重要なことである。本実践を通して、学生たちはこれからの家庭科教員に求められる力につながる学びを得ていた。作成した指導計画が実際の場で通用するものとなるためには、今後、授業を行う経験や観察する経験が必要であろう。しかし、教員としての自分の姿を重ね、複数の教員からの助言を受けたりお互いに指摘しあったりする経験は、学生が教員としての意識を高め、教員に求められる力を具体的に理解する機会となったと考えられた。

注1) 北陸家庭科授業実践研究会が、実証的な検討を重ねて作成した子どもの学びを可視化する枠組み。詳しくは、『生活主体を育む：家庭科カリキュラムの理論と実践』（2004）に詳しい。

参考文献

- 1) 文科省（2016）次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ、平成28年8月、教育課程企画特別部会。
- 2) 文部科学省（2008）中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」。
- 3) 文部科学省（1999）教育職員養成審議会第3次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化」。
- 4) 文部科学省（2012）中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」。
- 5) 高木幸子、山口智子、中村和吉、高橋桂子、杉村桃子、飯野由香利（2013）家庭科教員養成における教科専門と教科教育の連携－教科教育法における連携の試みと学習成果の事例検討、新潟大学教育学部研究紀要第6巻第1号（人文・社会科学編）、99－107
- 6) 高木幸子（2016）『家庭科授業がわかる・できる・みえる－家庭科教員養成における授業実践力の養成』教育図書、60－67
- 7) 高木幸子（2009）授業構造に着目した家庭科教員養成プログラムの開発、日本家庭科教育学会誌、51(4)、291－301

資料1 指摘された課題と受けたアイデア

No.	指摘された課題, 受けたアイデア
1	メリット部分の発見が多く, デメリットにも気づかせる場面があまりない。デメリットについて考えることができるよう, 事例などを示したり, 声かけが出来ると良かった。今後の食生活にどう活かしていけるのかを教えたほうが, 授業後にも役に立つ(今後について考える場面を設定しても良かった)。
2	和食に触れると書いていたが, 授業の中で詳しく取り扱う場面が作れていなかった。地産地消を扱っているが, 明確には視点が示されていない。
3	科学が苦手な子への支援が必要(やる気を落とさない工夫)。
4	さつま汁は郷土料理だが, あまり生徒には馴染みがない。ワークシートに手順を考えた理由をかける欄を設けたほうが良い。評価する時間が短い。
5	正しい落とし方で落とした場合の布も用意すると, どれだけ落ちるか生徒の印象に残ると思う。自分たちで落とす汚れや方法を選べるのは生徒が惹きつけられて良いが, 一つの汚れに対して教師が決めたいくつかの方法を試させるほうが確実に落ちることが確認できる。
6	実験後に「どうすればよかったのか」など, 生徒に考えさせると理解が深まりやすい。
7	環境問題に関連付ける部分に時間をとったほうが良い。実験評価を目で確認だけだと不正確。洗浄後のワークシートの書き方が難しい。
8	採寸する時のペアの配慮(男女など)。自分にあった服を着ることは心地いい!と生徒が感じられるようにする(合っていない服をきた写真例や試着例で)
9	グループ活動を取り入れることで, 自分と違った意見などもっとたくさんのことを吸収することができる。事前に生徒が知っていることと知らないことをはっきりさせておくとうい。
10	C評価になる子への支援や補助を考える。「危ない」以外に, 改善するための手立てを行う。
11	インフルエンザなど, 身近な例を取り上げることで室内環境を整えることの大切さがわかりやすい。グループ活動を取り入れるなど学習形態を工夫する。
12	マグニチュードなどの解説を丁寧に行う, 学習内容を次回に活かそうとする視点が無い。面白いと思って欲しいところをもっと工夫する。
13	インテリアコーディネーターとは何かという説明をすともっとよい。ICTを活用すともっと楽しい(カラー配色パターン, 家具のカatalogなど)カラーコーディネートと照明だけではまとめの活動が難しそう。「なりきる」ことを恥ずかしいと感じる生徒がたくさんいるかも知れないので, もっと「やりたい!」と思う工夫をする。
14	問題点から家族がどんな思いをするのか, 相手の立場にたって考える時間を作る。ノートとワークシートの統合, 複雑な家庭の子への配慮, 家族関係がプラスになったときから考えるのもよい。生徒自身の家族について考え→家族の例の順について。
15	ロールプレイングのシチュエーションに難易度の差がある。実際に生徒がシナリオを作る場合の難易度や支援を考えておく必要がある。
16	全14時間だと, 中3の1年間のほとんどを使ってしまう。グループを作るときは, 兄弟がいる人や, 幼児が身近にいて扱い慣れている人たちが分散するようにする。メディアをうまく活用する。

資料2 相互交流によりよさを評価された内容

No.	よさを評価された内容
1	身近な0%オレンジジュースを作る実験は、生徒がより身近に感じる。添加物だけで作ってしまうことを体験し、視覚、香り、味覚など学べる手立てが良い。また、メリット、デメリットを考えて目的を学ぶ流れが良い。身近な飲料を作る実験を設定することで、興味をもって取り組めるところが良かったかなと思った。
2	旬の食材を生かした調理実習を考えている。新潟の郷土料理だけでなく、他県のことについても触れられている。自分の食生活に繋げた授業になっている。
3	他教科との関連を大切にしたい点。今までやってきた家庭科の内容を生かした点、調理の後にまとめとしてパンフレットを作る作業、調理実習の前に体験があり、知識→体験→応用となっているところ。
4	生徒たち自身が考えて調理する内容。考える際に、これまでの学びやワークシートの使用を取り入れている。郷土料理に触れている。
5	授業準備のことを考えている。衣生活+環境を扱い、他単元内容のおさらいになって良い。題材観が現代の社会をよく捉えている。つまずきへの支援がわかりやすい。実験が多く、飽きない。
6	自身の衣服に注目している。失敗実験を行うことで、記憶に残り実践に活かしやすい。新表示と現行表示との比較により違いがわかりやすい。かるたゲームの利用は生徒の興味を高め楽しく覚えられる。
7	実験結果をあらかじめ写真で用意した。洗濯のボタンに関連した授業づくり。実験中に注意する点を詳しく指導案に書いてある点。
8	採寸の機会がないので、採寸により今後の衣生活に活かせる点。自分がしてしまった失敗例を基に生徒が考えることで、考えやすい、身近に感じやすい点。
9	長所・短所を考えることで理解が深まる。衣服の現状について知ることで、どうして処分するのか、どうやって処分すべきかがわかる。生徒の実態から、これからの生活に活かせる学びになっている。
10	評価が細かくて良い。障害者、高齢者、幼児の視点でそれぞれ考えられるのが良い。家について中学生は考えることがなかなかないのでよい。体験をして考えられる。
11	限られた授業時間の中で、生徒が実感できる体験的活動を取り入れている。自分の生活と関連させながら計画・実践・まとめ・反省と順序よく授業が進んでいる。知識を与え、具現化しながら実践へ持っていくことが、生徒が生活へと活かす際の手立てとなる。視覚教材
12	体験をたくさん取り入れた点。三大地震の要点のまとめ方
13	導入で座学になりやすいところに体験活動をいれている。設定（ひとり暮らしにあこがれる時期）がよい。色から感じるイメージ図があることで部屋の色のデザインがしやすい。自分の部屋のコーディネートに関心をもつことができる。
14	教師と生徒の会話が詳しいので、つまずきへの支援が考えやすい。勤労感謝の日に向けて実践計画を立てている。客観的に家族を見た後に自分の家族について考える流れを考えている。
15	I) 多様な家族の形があることを分からせることで偏見をなくすることができる。'家族に対する価値観の改革'は生徒の考えとのギャップを感じさせることができる。 II) 自分と家族との関わりを点数化することで、自分の行動を振り返りやすい。 III) 携帯電話会社の「家族割」に着目した点が身近で良かった。
16	幼稚園の先生に実際に中学校に来てもらい授業をしていただくことは、説得力がある。余裕をもった時間設定、幼稚園訪問に向けたリハーサルを行うこと。映像の活用。